慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 三田哲学と私(1) |
| Sub Title | On Mita Philosophy Society and myself |
| Author | 沢田, 允茂(Sawada, Nobushige) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1990 |
| Jtitle | 哲學 No.91 (1990. 12) ,p.53- 54 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 文学部創設百周年記念論文集I<br>Essay |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0053 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 三田哲学と私

名誉教授　沢　田　允　茂

「三田哲学」という語を，「三田哲学会」という組織体の名称を意味するのではなくて，三田を中心におこなわれていた慶應義塾大学での哲学活動を意味しているものと考えるならば，私は三田哲学の中で成長し，その中で活動してきたわけである．いうまでもなく私だけでなくてすべての哲学者は，プラトン，アリストテレス，デカルト，カント，ヴィトゲンシュタイン等々，あらゆる時代，国々の哲学者と（書物を通じて）つき合いながら哲学活動をし，成長していくものであるから，私のばあいでも慶應義塾大学とか三田といった限定された地域の中だけで活動し成長したわけではない．しかし哲学の勉強の最初の時期であれば，本を通じての活動も勿論必要であり大切であるが，具体的な人間との接触を通じての交流の方が，単なる哲学上の知識の成長だけでなくて，哲学するという態度，ひいてはそのような態度を持ちながらどう生活していくか，という生き方の成長にとって決定的な大きな影響を及ぼすのではないだろうか．少くとも私自身のばあいはそうであった．

その意味で私と三田哲学(者)との最初の出合い，そして決定的な出合いは，私が大学予科で日吉の校舎で学んでいた頃の松本正夫との出合いであった．このとき私は，それまでの本と活字とを通じての哲学思想との交流ではなくて，生きた，そしてそれ自身成長しつつ生きていた人間としての哲学者を通じての哲学に始めて接することができたのである．紙数の関係でくわしく述べることはできないが，私が大学の哲学科を卒業し，そして大学に残って生涯哲学の研究をつづけつつ成長していく過程で，いうまでもなく私はデカルト，カントあるいはヴィトゲンシュタイン，ポパーなど

の多くの外国の哲学者に刺激され影響されてきた．また近来では諸科学の成果に影響されてきている．しかしそれらをどう受取り，どのように自分自身の考えに同化していくか，というやり方自身は，これら外国の哲学者から学んだとはいい難い．こういう「やり方」自身は「挨拶のし方」や「食事の食べ方」と同じで，どこから学んだなどということは自分では意識したことはないのだが，よく考えてみると，幼ない時の両親や身近にいた人びとの無意識な模倣から来ているということに気づく．それと同じように私の「哲学の学び方」，「哲学的思想をもった生き方」というのも，——これは幼時の両親の模倣というわけにはいかないが——哲学的に幼なかった(私のばあい大学予科，現在では高校から大学の時代)日吉，三田の時代に，常に私の一番近くにいて，私が常にその哲学にぶつかり稽古をしてもらっていた松本正夫という慶應の中に生きていた一人の哲学者から無意識のうちに学び，模倣し，自分のものにしてしまったものだ，と断言することができる．

このようなことをかえりみながら，私は次のことを云っておきたい．大学で哲学を教えるということは，勿論，哲学の知識を書物を通じて解説するという教え方も必要であることは云うまでもないが，私が経験し学びとったような，哲学する姿勢そのものを（勿論無意識のうちに）学ぼうとするものに示し，学ぶ者もそれを身につけるような，人と人，哲学者（書ではない）と哲学者の肌にふれたコミュニケーションが如何に大事であるか，ということを——．巨大になり組織化され，全体の組織に従って動かされていくような現在の大学の中でこのようなことを求めるのはノスタルジーといわれるかもしれない．しかし現在を無批判に受取り，それに従っていくことを拒否することのなかに哲学的批判の存在理由があるとすれば，このノスタルジーを現実に生かしていくことも哲学的活動の目標の一つではないかと私は考えるのである．